

この本と私

読むことで、気付くこと
書くことで、判ることがある

「人生の賞味期限」

藤本 義一 著

先日、お亡くなりになった藤本義一さんの本が読みたくなり、本書を手にしました。この本が書かれたのは氏が68歳のとき。それまでの生き様を綴っています。一貫して語られてるのは、人との交流こそ財産との考えで、家族と地域社会から人間性が培われたと回想しています。忘れ得ぬ人として、何気ない会話から人の道を教えられた近所のブリキ屋のおっちゃんのこと、隠さず己の失敗談を話してくれた父のことを挙げています。氏の考え方の指針ともなっている漢字の意味を解釈することから物事の道理を理解する方法も父から学んだそうです。この方法は、氏の子供や孫の教育手法ともなっています。

10歳で敗戦を迎え、実家の商いが破壊され、23歳の時に映画監督川島雄三に弟子入りしました。満身創痍の体にもかかわらず、作品をつくるために、一所懸命に生きる川島監督の姿に人生観を観ます。以後、生かされている自分を認識し、1人の人物を取り上げ、その人の郷里と生き方をたずねて歩くドキュメンタリー「歴史探訪」を手がけ、氏ひとりで構成し、喋るといふ独自のスタイルを確立しました。また、時代の問題点にも正面から向かってゆきました。精神障害について取材するために当時の精神病院に体験入院しています。患者たちは純粹なゆえ、人間排除の効率優先の工業化が進むゆがんだ社会の餌食になったのではないかとの考えに行き着き、戯曲「迷子の天使たち」を書いています。初めて読んだ藤本義一の優しい心根に惚れました。

岩波書店

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞